

編集後記

本年3月をもって6年間の任期満了に伴い、日本消化器外科学会誌編集委員を辞することになる。責を果たした喜びと、何か一抹の淋しさが交錯するのは、それだけこの編集委員会に対し、私なりに思い入れを持ってこの6年間に過ごしたせいであろうと考える。

毎月の編集委員会は他の学会誌の編集委員会にない厳しいものであった。

九段の靖国神社前にある消化器外科学会事務局に向かうため、渋谷そばの病院から青山通りを通り、三宅坂、皇居を抜け、千鳥ヶ淵から靖国神社の駐車場に至る道程は、大都会の中にもある季節の変化する様を観察する往復でもあり、特に靖国神社の境内にある森は、私にとって実は自然との一時の触れ合いの時でもあった。

6年前、当時編集委員会は鍋谷欣市委員長をはじめ、大先輩達が編集委員として揃っておられ、新米の私は編集委員会の度に大変緊張したのを憶えている。毎月郵送されてくる10編にもおよぶ論文を査読するのは大変苦勞もしたが、自分の専門外の論文に出会った時は文献を読みながら勉強し、また、他の編集委員の考え方、物の見方を見聞きすることで、私自身大変勉強になった。やがて、編集委員長が大原 毅先生に変わられ、若干編集委員の人数も増えたこともあって、毎月の査読論文数は減ったが論文内容は、増々細分化し、専門化するため査読の苦勞は相変わらずで、他の編集委員も同じだろうと思うが電車の中や、学会出張中のホテルの中や、時には手術室のラウンジに論文を持ち込み査読することもあった。前編集委員だった、ある教授が編集委員を辞してから、“日曜日が楽になった”とおっしゃっていたが、私も編集委員を辞してからそんな感慨にふけるものかもしれない。しかし、素晴らしい見識と人格をおもちの編集委員会の諸先生方と月一度お会い出来なくなるのは、残念な気持ちに致します。私自身振り返って見てこの6年間、レフェリーとして立派にその責を果たせたのかどうか自信がありませんが、“レフェリーであることは、科学研究活動に付随する責任の一つである(山崎茂明著、生命科学論文投稿ガイド)”という認識のもとに努力したことを述べさせて頂き、本学会誌が文字通り日本を代表する邦文学会誌に発展されんことを祈念して、編集委員を辞する言葉とします。

(1997年2月；炭山嘉伸)